

郷土を知る 昔々の 曽市

第66回



大昔のジビエライフ...

生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

令

和2年7月号で紹介しました、縄文時代後期から晩期の洞穴住居跡である中岳洞穴は、国内トップクラスの獣骨（動物の骨）出土量を誇ります。

「洞穴を使っていた人たちの食料残滓（生ごみ）」と容易に想定できますが、実際のところ当時の人々の食生活を探る手掛かりはとも少なく、火山灰土壌で気候の移り変わりが激しい日本では有機物はすぐに分解され、食べ物の証拠は消滅してしまいます。

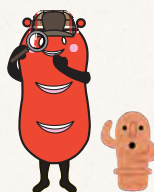
中岳洞穴は入戸火砕流堆積物由来の溶結凝灰岩で形成された自然洞穴で、内部は温度と湿度が安定しているといった好条件から、獣骨や貝殻といった有機遺物が消滅することなく残存しており、当時の食生活の一端を伝えてくれました。

獣骨を分類した結果、骨の出土総数は488点。内訳はイノシシ・シカ・タヌキ・アナグマ・ウサギ・ムササビ・サル・キジ。哺乳類は7科7属7種、鳥類は1科1属1種という成果でした。出土比率ではイノシシが全体の6割を占めており、身近な獲物であったと考えられます。

さらにイノシシやシカといった大型獣の骨には、人為的に切断され骨髄や脳を取り出した痕跡が見られます。現

曾於市史編さん情報局

曾於市にゆかりのある資料・写真・情報をお持ちの方は生涯学習課までご連絡ください。



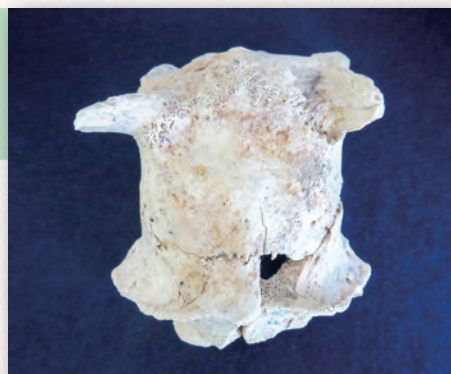
代の食卓ではあまりなじみのない部位ですが、これらも捨てることなく食し、貴重な栄養源であったようです。また炉跡や焼土、大量の炭や灰が検出しているのも、調理や保存処理を行っていることも考えられます。さらには狩猟のみではなく、イノシシの原始的な飼育の可能性、また獣肉とともに植物や魚、昆虫なども食料にしていたはずであり、これらの背景にある狩猟採集の生活もうつすら想像できます。

出土した獣骨は、現代の曾於市内でも確認できる種類ばかりです。人員の移動や開発、動物の増減といった若干の変化はありますが、過去も現在もそこまで自然環境は変化していない様相がうかがえます。



シカの頭骨
（脳摘出の痕跡）

イノシシの大腿骨と脛骨
（切断の跡）



実物は末吉歴史民俗資料館に展示
曾於市末吉町二之方2019番地